

《もくじ》

- 特集・奔流に漕ぎ出した本会の針路
2頁・長野県飯山市で設立総会&記念講演開催
の報告……田中 信次(監事)
- 4頁・大会決議と会則抄録「会員募集！」
- 5頁・青少年期を豊かに育んだ大河信濃川
……春日 寛(弁護士)
- 8頁・球磨川水系「荒瀬ダム撤去」と漁
民の関わり……木本 生光(漁民)

奔流

題字揮毫・梅原猛

《第2号》

- 発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
- 発行人・根津 東六(共同代表)
- 編集人・矢間秀次郎(共同代表)
- 〒振替・00120-0-710488

大河の一滴 (2)

水田養鯉が千曲川水質のカナリヤ

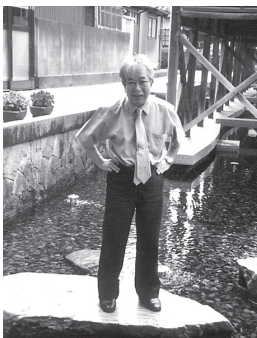
―海から最も遠い地域に、鮭の産院―

井出 孫六

甲武信ヶ岳中腹に源を持つ千曲川は、7キロほど北に向けて奔流し、三国山から流れ出る水を集めて西に向かい、梓川で梓川を、秋山と居倉の間で金峰山川を併せて川幅を広げ、大深山、原、本郷、御所平など、主要な集落を潤して流れていく。信濃川上村を貫流する千曲川には、大河の源流にふさわしい気品が感じられることがある。

川幅に比べて水深は大人の膝を濡らすか濡らさないかほどに浅く、川底の小石に目をやりながら、一つの空想がわたしをとらえる。今から二万二千年の昔、この清流の中を数えきれぬほどの鮭が子孫を残すために遡ってきて、不思議ではなからう。

昭和の初め、川上村の由井茂也青年



▲越前大野・名水御清水の里での筆者。

が野面や道路に落ちている黒光りのする小石を拾っていたことが考古学者の目にとまり、若者が蒐めていた小石が、数十キロも離れた和峠の辺りから運ばれてきた黒曜石であることが証明された。

ハガネのように鋭い黒曜石は、千曲川の主流で水揚げされる鮭をさばくためにどうしても必要なナイフだったのでなからうか。

信濃川上村から山ひとつへだてた北相木村の洞窟「栃原岩陰遺跡」からは総重量二百キロをこえる獣骨が発見され、なかには鮭、マスの椎骨も混じっていた。山つへだてた千曲川支流相木川の初期縄文人が鮭漁をしていたのは明らかだ。佐久は日本で海から最も遠い地域でありながら鮭の産院であったのだ。

千曲川には二四〇ほどの支流があるが、古村の多くは支流の棚田とともにすでに中世には出来上がっていた。古村の棚田は人工の貯水池であり、山林とともに緑のダムの役割を中世以来担いつづけてきたとみてよい。それにひきかえ、

盆地中央の水田開発は近世利水技術の発展を待つほかはなかった。

わたしの生まれた佐久市白田は千曲川上流の隣村に取水口を設け、白田より下流の佐久盆地八ヶ村はわたしの町に共同取水口を作らねばならず、江戸末期から明治を待たねば完成しなかったのではなからうか。

とはいうものの、これらの難工事と平行して佐久盆地には千曲川から十分な水が供給され、山間とは違って南から北に向かつて緩やかな棚田が開発された。千曲川の清流が田に引かれるや、佐久盆地の農民たちは左官顔負けのように強固な畦をつくり、畦に二尺間隔に大豆を二、三粒蒔いた上で、田植えを終えた。苗が根付いた頃を見計らって、メダカほどの鯉の稚魚をバケツに一杯二枚の水田に放った。稚魚は泳ぎ回って稲の分蘖を促し、水中の藻や害虫を食し、秋、田の水を落とす頃には立派な当歳になって食卓にのった。

田植え直前、畦に蒔かれた大豆は根を張って水田の決壊を防ぎ、空気中の窒素を根に固定して土に返還したあと、お婆さんの手にゆだねられて豆腐となり、味噌となった。水田養鯉は千曲川水質のカナリアであったのだ。

(第72回直木賞受賞)